

且つ又安政二年の地震此方の大地震であります。そして其震源も、安政のものと同じく東京の東北部に有つたのであります。此時家屋の全く破壊されたもの九十家、多少損害を受けたもの約五千家、煙突の倒れたものが三百八十許り、多少損じたものが四百八十許りで、此時には晝の二時少し過に起りましたから、幸に火事も起らず、死傷者も少く、死者廿四人、重軽傷者百五十七人と云ふ風でありました。當時は未だ水道の布設等ありませんでしたから、其方の損害は餘りありませんでした。此位の程度の地震でありますと、水道鐵管の破壊は多少ある可きでございます。(文二ノ三 平、神、天野)

お互の便利の爲、且つ、なるべく多く人の利益の爲、本誌は次號から特に質問欄を設ける事に致しました。本校の諸先生にお尋ねの事などが御座いましたら、盛に此の欄を御使用下さいませ様にお願い致します。(編輯係)

報 告 (3の1)

大正四年度我國に於ける文學、哲學、倫理及び教育の趨勢の概要を報告せん。

先づ先年度に於て吾人が意外に感ずるものは、文學界一般の不振なりしことなり。然りと雖もその沈靜なるの中に、亦新しき研究の擧ぐべきものも少からず。即ち國語國文の研究に於て、與謝野晶子氏の「新譯榮華物語」佐々木信綱氏の「和歌史の研究」坪内孝氏の「新譯徒然草」尾上先生の「短歌新講」内海弘藏氏の「平家物語評譯」等見るべきものあり。其他「國學院雜誌」「藝文」「帝國文學」等に現はれたる評論、「心の花」の万葉號の如きは、斯道研究に少からぬ便益を與へたり。更に帝國文學に連載し始められたる、故森治藏氏の遺著たる「國文學者年表」は、赤堀又次郎氏の「日本文學者年表」の後を續ぎしものにして、國文學上に至大の貢獻をなすものといふべし。更に國語學方面に於て劃期的の大作は、上田、松井兩氏の「大日本國語辭典」の刊行なり。この書は未完なれども發行せられし部分のみにてすら、從來國語字典の不完全を啣ちし吾人をして、大に力を強うせしむるものあり。又保科孝一氏主幹の雜誌「國語教育」の發刊の如きは事本年一月に屬すと雖も國語及國語研究の機運の漸く熟せるを見るに足り欣喜に堪へざるなり。此外一時旺りし外國文學の翻譯も漸くすたれて却つて新日本主義、新民族主義運動の起らんとする傾向を示せり。これ歐洲戰亂の影響により

て文學界は概して寂寞の感ありしとはいへ、反つて其のために國民的自覺を呼びませしものといふを得べし。

漢文界に於ては更に花々しき發表を見ざれども、尙、「東亞研究」及び漢文學會等に於ては其の研究を怠らず、それ等の紙上に載せられたる小論文のみるべきものも少からず。

哲學界に於ては、前年度より引き続き主としてオイケンベルグゼンの研究なりしが、その間に於て多少自家の主張をなせし哲學者の一團即ち桑木、朝永、西田、田中、紀平の諸氏ありき。桑木博士は講演又は哲學雜誌に於て、爾來の主觀主義及び自然科學、規範科學の區別論、及び價値の問題に抵觸し新なる意見を發表せり。朝永氏は哲學春秋講演會に於て「自然必然的、精神必然的、及び目的觀批判的」といふ題にて氏の豊富なる歴史的考證を傾けられ、紀平正美氏の「認識論」又西田博士の「思索と體驗」も亦自家の研究にして、田中王堂氏爾來の獨創的言論を發揮して一異彩を呈せり。しかれども此の間一時思想界に喧傳せられたるものタゴールあり。氏の吠沙優婆尼師土の世界觀人生觀は高遠にして、讀書界に空前の共鳴を致し、氏に關する著述陸續として現れ出でしがたゞ一時の現象たりき。

次に倫理的方面を見るに、歐洲戰亂の影響は著しくこの方面にあらはれ、一月の丁酉倫理には、故加藤博士の「道德の三階段」、或は吉田博士の「思想界の非國家主義の源泉」、又二月には同雜誌に於ける朝永氏の「獨乙思想と軍國主義」の論文あり。朝永氏の論に曰く「獨乙思潮に二大系統あり一つはカントヘーゲルの理想主義的國家主義を祖述するロッツェの新理想主義、及びその亞流なるキンデルバンド、オイケン等の思潮にして、二はカールマルクスの唯物論的、非理想主義的、現實的思潮に胚胎するトライチケ、ビスマルクの

軍國制策、精力主義、及びこれを哲學的に説明したるニーツチエの、君主道德説等にして、今や獨乙は理想主義を捨て軍國主義の奴隷となりつゝあり」と。かくて三月には外國雜誌の輸入と共に、ケンブリッジ大學講師ラツチル氏の「戰爭の倫理」は讀書界の注目する所となり、ついで五月にはハーバート大學教授ペリー氏のラツチル氏を駁せる、「無抵抗と現時の戰爭」著はれ、我道德界の注目する所となりき。これに對して我が中島力造博士は、六月の丁酉倫理にて穩健にして周到なる批評を加へ、主戰論平和論の共に誤なる所以を論破し、國際法を行はしむる力は國際的輿論にして、輿論は國際道德意識の發達に伴ひて生ずるものにして、この國際的道德輿論を振作するが今後の義務なりと結論せり。又同博士は、博士を中心とせる讀書會員の時局に對する道德論を編して「今後の國民修養」と題する有益なる書を發表せり。

しかるにこゝに方面を異にして、昨春以來倫理問題の中心となりしは貞操問題にして、諸大家によりて種々なる論説を試みられたり。中にも宮田脩氏の「貞潔の道德的原理」は之を一層學術的に取扱ひしものにして注目すべきものといふべし。更に九月に入りて、朝野に亘りての大問題は乃木家再興問題なりき。しかるに十一月に入りて我國民の頭腦を占有して、殆ど空前の道德的感激を與へしものは即位の大禮にして、皇室に對する尊敬、及び國民的共同の精神帝國全土に普及せられ祭政一致、政教一致の思想、上下に亘りて發現せられ、皇室と臣民との關係は更に近接しおほみたからの思想の一層判明せしは、實に慶賀すべき現象ならずや、我々は須くこの方針に向ひて更に一步を進めんことを期せざるべからず。

翻つて眼を教育界に轉せんか。是れ又前述の軍國主義、現實主義の影響によりて、從來の空漠的、抽象的なる教育説より轉じて、稍々具体的なる軍國教育、職業的教育となりて提唱せらるゝに至れり。これ理想主

義の短所に對し、是を補綴せんとする現實的要求とも見るべきものなり。此の如き時代風潮以外に尙、人格的教育説、新個人主義的教育説、創作作業的教育説、自働主義的教育説等も盛に唱道せられ考究せられたり、而して、前二者は主として教育の目的論に關係し、後二者は方法的方面の新潮なり。されど斯かる中にも、大正四年の教育思想界に於て、人々の眼底に最も眞實に映じたるは具体的國家主義の教育にして、他は文學士河野清丸氏に依つて提唱せられたる自動主義教育説なり。氏は「自働主義最新教授論」「モンテッソーリ教育法眞髓」等の書を表はして、極力自動教育を主張せり。具体的國家主義の教育は、湯原元一氏、川本宇之助氏、及び渡部蘇影氏等によりて唱導せられたるものにして、是は人間生活を具體的に見て從來の空漠なる社會的教育説には其の内容を提供して之を活かし、又個人的教育説には其の社會的實在性を附與して之が抽象性を補ひしものなり。其の他中島半治郎氏、稻毛詛風氏等によりて主張せられたる人格的教育説ありて從來の個人教育説と社會教育説との調和を目的として説けり。

要するに、大正四年度の教育思潮界は、從來の抽象的なる個人對社會説より一步を進め、實際生活と密接の關係を有する具體的觀念の上に立ちて、其所に目的論としては人格説か公民説かの争闘を起し、方法論としては創作作業主義自働主義等を見るに至りしなり。而して其の間に人間生活の具體的基調に致つて益々進まんとする眞實にして喜ぶべき傾向の存する事を發見し得るなり。

惟ふに、大正四年の教育實際界は、一ヶ年を通じて、誠に、多事多端なる歳なりき。大正四年歳改まるや國定教科書制度打破問題、雜誌界の一角に起り、次に東京高等師範學校に於て端なくも端緒を開きし小學兒童掃除問題を生じ、更に兒童休業問題、夏期休業問題等續出せり。更に實社會的問題となりしものは學制改

革問題にして、學制新案は教育調査會に討議せられ、今後主要なる論題として繼續せられつゝあり。此の間にあたりて女子教育家の叙勳せられて、我が佐方、後閑兩先生亦この光榮をになひ給ひしことは、一般女子教育界及び生等の慶賀措く能はざるところなり。

大正四年もまさにくれんとする十二月十一日、我が叡聖文武なる 天皇陛下長くも教育に關する御沙汰を下し給へり。殊に感激の情に堪へざるなり。我等教育の任に當るものは、一層慎重なる態度の下に、世界的文明の推移を正視大觀し、以て深き經驗と透徹せる思索とにより、將來の教育的方案をたて、之れに對つて緊張せる力を以て努力せん事を期せざるべからず。

茲に大正四年に於ける文科に關する事項の一部を報告す。(文一ノ四 馬庭敏)